

## 良寛と有願の花見

仲町の詩友神保柳波の家に泊った良寛と有願は、翌朝連れ立って桃の花見に出かけた。二人の風流坊主は中ノ口川の堤防を歩きながら、見事な花を眺めていたが、そのうち良寛は、

この里の桃のさかりに来て見れば  
流れにうつる花のくれない

という歌を詠んだ。すると有願も、

ふるさとは桃の林に牛の子の  
遊ぶのみにてみな耕せる

と詠んだ。そのうち日が西に傾いてきた。気がつく二人は非常にお腹が空いており、もう歩けないほどになっていた。ふと見ると、前方に一人の乞食が握り飯を手に持ったまま死んでいた。二人は側へ寄って、

「仏さまのお恵みだ。いただきよう」といって、その握り飯を二人で分けて食いながら新飯田の方へ歩いて行った。